ひなの育ち方

chick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひなの育ち方

【Ｎコード】
Ｎ５８７４Ｑ

【作者名】
ｃｈｉｃｋ

【あらすじ】
「夜の街」を舞台にしたヒューマンものです。

1. side S

秋の終わりかけの寒さが、モッズコートの中に容赦なく滑り込んでくる。大学構内から地下鉄の駅へと向かう学生の波に乗って、歩きながら思わず体を縮ませた。持っていたギターケースが全身で風を受け止め、小柄な自分ごと吹き飛ばされそうになる。

「すみませんっ」

その言葉にあわてて振り返ると、申し訳なさそうな表情の女性と目が合った。たぶんケースがすれ違いざまにぶつかったのだろう。

謝るのは自分の方なのに。

いつもそうだ。できなかったこと、言えなかったこと、それを後悔するのはいつも誰かに先を越された直後だった。言おうと思っていたわけではない。だからこそ、言われて初めて、言いたかったのだと気付く。そしてたちの悪いことに、言えなかったという事実だけがいつまでも残っていく。情緒不安定なのは生まれつきかと思うくらい、さまざまな物事に心が連れ去られてゆく。

大学生になって三度目の冬。今いちばん心を揺さぶられるのは、スーツ姿の学生を見たとき。今までに三回開かれた就職活動ガイダンスに出席もしなければ、進学志望というわけでもない。本当ならば履歴書を書き始めたり公務員試験の勉強をしたり、やらなければいけないことはあるはずだった。だけど今日もギターを片手に地下鉄に乗らずにはいられない。好きなことをしているはずなのに、何をやっているのだろうと思ってしまうあたり、やはり自分は情緒不安定なのだろう。

コートのポケットから財布だけを出そうとして、パスケースを引っ掛けてしまった。二つ折りのそれが開いて落ちる。

河野清花

パスケースの片側に入れた青い学生証。顔写真が四年間変わらないとわかっていれば、もう少し余所行きな顔をして写ったかもしれない。プラスティックのカードに埋め込まれた三年ほど前の自分は、なぜかカメラを睨みつけていた。不健康な白い肌と一重の割には大きめの目。おろした前髪の向こう側には整えた気配のない眉毛が見える。

何も変わってない。

パスケースをポケットに押し込んでホームへ向かう。

自分が乗った車両は、授業終わりの学生で混雑していた。その人口密度が冷たい体にはちょうどいい。何気なく車内を見渡すと、私服と制服の中にスーツ姿の学生が見えた。知り合いでもないのに思わず目をそらした自分は、現実逃避の真っ最中だった。

ギターを背負って向かうのは、とある駅の北口。住宅街やスーパーが並ぶ南口と有刺鉄線で区切られた北口は、高校生なら校則で出入りを禁止されるような場所だった。未成年の犯罪としてピックアップされるような事柄が毎夜のように行われている場所…というのは高校時代に友人から聞いた話。それでも、周囲の町に問題がない分、いわゆる「やばい」ことは北口に集中しているように思えた。

北口に行き始めたのは、今年の夏。

きっかけは、小春。

＊＊＊

今でも頭から離れないシーンがある。小春と初めて知り合ったときのことだ。高校一年生のときだった。音楽の授業で席が隣同士になって、小春から話しかけてきたのだ。

よりによって、なんで私。

安東小春

自分とは正反対のところにいた小春。抜かりのない化粧と、短めのスカートから伸びた細い足。視線の運び方や口角の上げ方は研究されたものだと今でも思っている。のんびりとしてぺたぺたとした喋り方、ウェーブがかった茶髪からする匂い。

小春は言葉を発することなく、常に全身で自己主張していた。そしてその自己主張は相手の五感をも染めてしまう。たぶん自分も、小春に染められた一人なのだ。

自分はと言えば、不健康な白い肌と一重の割には大きめの目――つまり学生証の写真と大した差はない。さらには膝丈のスカートというイマドキにはほど遠い見た目をしていた。化粧をして流行を追いかける女子たちがどうも苦手だったし、向こうも自分みたいな野暮ったい子を友達にはしたくないだろう。

「よりによって、なんで私」

その答えはもう覚えてはいない。

小春は見た目に反してさっぱりした性格をしていた。いつもにこにこしていて「喜」と「楽」しか存在しないような生活をしていて、自身のことも周辺のことも話そうとしない。そして他人のテリトリーに踏み込むこともなければ、口が軽いということもない。

最初は見た目だけで苦手だと思っていたのだが、初めて一緒にいて楽だと思ったのが小春だった。

しかし小春はその見た目のせいか教師たちには好かれていなかった。

「あまり安東とつるむなよ」

なぜか当時の担任の言葉も私の頭から離れてくれなかった。

結局小春とは大学三年生の夏まで一緒にいることになる。頻繁に遊ぶ仲ではなかったものの、なんとなく、いつも自分の近くに小春がいた。同じ講義でよく一緒になる仲間内は五人ほどいたと思う。たぶんみんな、小春が好きだったのだと思う。小春の周りには常に誰かがいた。

そんな小春は三年生になると同時に大学に来なくなった。仲間内では誰も何も聞かされていない突然の出来事だった。

「小春、どうしちゃったんだろうね」

「そういうのは清花がいちばん知ってるでしょ」

誰かの言葉、それに同意する声。それを仲間内からちょっと離れた場所で聞いていた。小春が来なくなってから居づらくなり、あの仲

間たちからは離れてしまった。

聞こえてきた言葉も何気ない一言だったと思う。周りから見れば小春といちばん付き合いが長いのは自分だし、みんながそう言うのもわかる。しかしそれと同時に、小春なしではあの場所に居られなかったのだと自覚させられた。

「男作ってやばい町で暮らしてるらしいよ」

誰かがそんなことを言った。「やばい町」があの駅の北口方面を指していることはすぐにわかった。

小春が北口で男と暮らしている。

小春はそういう子じゃない、と思ってみても、どういう子なのかはうまく言葉にできなかった。

それでも小春のそんな姿を認めたくはなくて、北口へ行くことを決めた。

＊＊＊

北口に着いたのは、六時を少し過ぎた頃だった。季節のせいか外はもう暗い。街灯はあるものの、たいていは点滅しているか明るさが足りないものばかりだった。ここは誰にも管理されていない町なのかもしれない。

もしかしたら女性たちの派手な格好に街灯が負けているだけなのかもしれない。男性客を惹きつけることが仕事の彼女たちは、化粧にも服装にも、仕草のひとつひとつにも余念がなかった。

ここにはいろいろな人がいる。性別不明の人も、高校生も、おじいさんもいる。コンクリートのひび割れに挟まっている欠けたヒールの持ち主も、きっとここにいる。違法行為は一目見ただけじゃわからない。きっと、もっと路地裏の方でやっているのだ。

最初は駅から北口を見下ろすことが精一杯だったが、今ではこうやって自分の足で立っている。ただひとつ、自分の中で決めていることがある。それは、路地裏へは行かないということ。

北口の人々を見ていると、なんとなくマーブル模様を思い出す。ドット模様のようなひとりひとりの自己主張さもなければ、ボーダー模様のような規則正しさもない。ぼんやりと人々が一緒くたに馴染んでいるだけなのだ。

数十メートル先に見える、いちばん明るくない街灯を目指して歩き出した。静まり返った町ではないはずなのに、自分の足音がやけに響く。他に耳に入ってくる音は、女が男を誘う甘ったるい声と、少々のギターの音色。共存することもなければ反発することもない、マーブル模様。

北口はなんとなく小春に似ている。「喜」と「楽」しか存在していないところや、他人には妙に無関心なところ。だからきっと、この町は心を開いていないし、口も堅いと信じていた。

街灯の下でギターケースをゆっくりと開ける。毎日開け閉めしているはずなのに、寒さのせいか金具は堅い。力任せに金具を指で持ち上げると、その冷たさに指先がしびれた。そのままの指でチューニングをする。機械がなくても、自分の満足できるくらいの音合わせはできる。

演奏してしばらくすると、女の子二人が私の前にしゃがんで演奏を聞いてくれた。仕事前というよりは遊びに来ているらしい。スウェット姿や眉毛のないノーメイクで務まる仕事はここにはない。弾いているのはオリジナル、というよりも適当と言った方が近い。ハイテンポの曲よりはローテンポの曲の方が好きで、バラードよりもフォークソングに近い。

ローテンポに浸りそうになりながら、彼女ら越しに小春を捜すことを忘れない。見つけた瞬間にギターを投げ出す覚悟だってできている。

小春を見つけられないまま演奏が終わって、形式だけのおじぎをする。乾いた拍手が、二、三回。

「なんていうか、若者っぽくないよね」

彼女らはそんな感想を残した。自分に発せられている言葉ではなく、彼女らの会話の一部。

「時々来る、シンってヤツ、あいつすげーよ」

がらがら声でそう言いながら彼女らは去って行った。

気がつけば、名前も顔も知らない人に、意味もなく嫉妬をしていた。

＊＊＊

自分の目の前を、ぱらぱらと若い女と中年のおじさんが通り過ぎていく。どうして若い女とおじさんの組み合わせが多いのかは、つま

り、そういうことなのだ。「若い女」は、それだけで仕事ができる。誰も立ち止まる気配がないのですぐ後ろの縁石に腰を下ろした。もしかしたらこの中に小春がいるのかもしれない。もしかしたら、おじさんと一緒に歩いてくるのかも、しれない。

ギターは元々父の物だった。

フォークソング世代に生まれた父がギターを弾いていた話は、親戚から何度か聞いた。予備校の寮でギターの練習をして怒られたこともあるらしい。それを父に問うと、照れくさそうに笑って何も教えてくれなかったことを覚えている。父のその顔が好きだった。

その後両親は離婚し、父は家を出た。もうすぐ高校生になる春休みのことだった。

相性が悪い母との二人暮らしは、つまらない以上のものだった。

だから、納戸の奥にぽつんと立っているギターケースを見つけたとき、それを自分の部屋に持ち込んだのだ。一度だけ弾いてみたが、階段の下からそれをとがめる母の金切り声が聞こえてきたので部屋の隅に置いたままだった。

その反動なのか、高校の音楽の時間では、ひたすらギターを弾いた。小春と一緒に弾いたこともあった。自分は周りよりも指使いの飲み込みが早かったらしく、授業のたびに小春はすごいすごいと目を細めた。

小春は嫉妬をしないのだろうか。先ほど自分が抱いた意味のない嫉妬を思い出しながら、そんなことを考えた。そういえば驚いた姿も

見たことがない。本当に「喜」と「楽」以外小春には存在していないのだろうか。

考え事を遮ったのは、吹き抜けた風だった。お尻から全身が冷えている。

いい加減に帰ろうと立ち上がったそのときだった。目じりの端をかすったのは、ウェーブがかかった茶髪。急いでそちらに顔を向けると、数メートル先を若い男女が歩いていた。紛れもなく小春だった。なんともあっけなかった。こんなものか、と思いながらも、しばらく世界が止まった。

小春の隣にいたのは中年のおじさんではない。若い男の人。少々伸びた黒髪のせいでその顔は見えなかった。お似合いの、カップルだ。

小春は、笑っていた。記憶の中と変わらない笑顔で笑いかけていた。仕事をしているわけではないのだろうか。あれは普通のデートなのだろうか。でもなんでわざわざここで。考え出したらきりがなかった。

それでも、不思議としっくりきた。ああ、小春はきっと、そういう子なのだ。どこへ行っても不思議となじんでしまう。そう思うと、心で暴れていた驚きの感情がすっと抜けていった。

小春が自分に気付くはずがない。もしも気づいたら、小春はどんな顔をするだろうか。普通に町中で会ったときのように笑顔で近寄ってくるのだろうか。もしも小春が笑顔で近づいてきたとき、ちゃんと自分も笑えるだろうか。

マーブル模様の中に二人が溶けてゆく。その後姿を見つめるだけで、結局何も言えなかった。言えなかったという後味の悪い事実だけがいつまでも残っていく。

かじかむ手でジーコードをひとつ鳴らした。

自分は、猛烈に、空っぽだ。

side．S－完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5874q/

ひなの育ち方

2011年10月8日17時12分発行